

# 比較文學研究

- 七五の宿命——新=日本韻律論……………川本 皓嗣 (1)  
蒲原有明における「愛」のイメージ  
——「ゆふづつ」「夕かげ」とD.G. ロセッティ  
「天なる嘆き」の影響をめぐって……………菅原 克也 (53)  
日韓近代詩の比較文学的考察——金素雲訳編  
『朝鮮詩集』における恋愛……………林 容 澤 (70)  
俳句と Haiku……………新井 潤美 (108)  
E・マイナー「体系的詩学の発展」  
に対する一疑問……………猪俣 賢司 (116)
- 
- 『おくのほそ道』の構造……………平井 照敏 (123)  
李箱の詩におけるモダニティ  
——その断絶性について……………李 福 淑 (128)  
『眠れる美女』……………鶴田 欣也 (140)
- 
- 『源氏物語』の変容  
——英訳の「語り」をめぐって……………北村 結花 (157)  
光源氏へのいざない……………石黒 ひで (173)  
(北村結花訳)  
『平家物語』「那須与一」説話について……………李 碩 浩 (181)  
一茶の句における日本の家 ……ニナ・ユイ・デ・ハセガワ (189)
- 
- 〔書 評〕  
『萩原朔太郎——詩的イメージの構成——』  
(岸田俊子)……………小川 敏栄 (197)  
『平塚らいてう——近代と神秘——』  
(井手文子)……………佐々木英昭 (207)  
『蛇神伝承論序説』(阿部真司)……………増田裕美子 (210)  
*The Fracture of Meaning* (David Pollack)  
……………小林 康夫 (214)
- 
- Le Rond-Point  
自由と誇りと独立と——ワルシャワ生活と  
ワルシャワ大学日本学科印象記——……………水島 裕雅 (218)  
田代慶一郎氏博士学位論文  
『文学としての謡曲』公開審査……………佐伯 順子 (222)  
平田秃木選集刊行記念会……………瀧田 佳子 (225)  
研究室だより——八王子大学セミナー・  
ハウスでの研究合宿——……………神 敦子 (231)  
欧文要約……………(1)

52

東大比較文學會

# 一茶の句における日本の家

——パシユラール『空間の詩学』に照して見たその「居住機能」——

ニナ・ユイ・デ・ハセガワ

ここでは一茶の夏の句、とくに住まいを主題としている句を選んで、一茶における住まいの感覚について考える。そのために一茶の句をガストン・パシユラールの『空間の詩学』<sup>(1)</sup>に基づいた目で考察してみたい。

パシユラールは居住機能について次のような考えを持っている。

「生命が住まいをみつけ、身をまもり、身をひそめ、身をかくすとたちまち想像力は保護された空間にすむ存在に共感する、ということをわたくしはしめたい……想像力はさまざまにことなる安全度をしめす保護をくまなく体験する。」<sup>(2)</sup>〔一七三頁〕

「もし家のもっとも貴重な恩恵はなにかとたずねられたならば、家が夢想をかくまい夢をみるひとを保護し、われわれに安らかに夢みさせてくれることだと、わたくしはいうだろう。」〔四一頁〕

そして居住機能にとって最も重要な概念である *intimite* について次のように言う（岩村行雄氏の訳では、「*intimite*」は「内密」と翻

訳されているが、仏・西・英語で通用している「*intimite*」の概念に完璧に一致する日本語が見あたらないため、本論ではパシユラールの原文に登場する「*intimite*」——英語でいえば、*intimacy*——をそのまま使用したい。）

「これからわたくしは、うつろいやすく、あるいは空想的なものではあるが、しかしもっとも人間的な根をもつ内密の印象に注意をむけたいとおもう。」〔一七八頁〕

パシユラールが居住機能として指摘しているもの——お互いにそれらはそれぞれ密接な関係を持っているのだが——の中で、私が一番魅力を感じているのは *intimite* の問題である。パシユラールは彼の本で、冬は心に *intimite* をとりわけ提供する季節であると言っている。それはたとえば以下の表現、「そして外が寒いから、われわれはたいへん暖かいのだ。」〔七五頁〕とか「家は冬がたくわえた純粹な内密をうけとるのだ。」〔七六頁〕といった表現を通じて知るこ

とができる。

パシュールはこのようにして、夢想や「intimite」の世界において、冬に特別な力を認めている。しかしそれは冬だけに限られるのだろうか。夏にもそうしたものが強く生きているのではなからうか。そして暑さの中で、特に夢想や「intimite」を起す時間として私が連想したのは、暑い気候の国での昼寝の時間であった。昼寝の時間というのはすべてのものが沈黙に落ちる時間である。時間が停止し、暑さは我々をふだんより緩慢にさせ、我々の現実的な感覚を鈍らせる。その時に我々は眠り、もしくはまどろみに支配され、夢と現実のはざまに迷い込む。

明治以降の日本の近代文学の作家たちの作品の中には、パシュールがいう「孤独の空間」に近い「intimite」の感覚が、とりわけ住まいの描写の中に多く現れている。では、そうしたことが直接的に現れない西洋の影響を受ける前の日本の文学、それも俳句の形をした一茶の詩には何らかの「intimite」が見られないだろうか。もし見られるなら面白いだろうと私は思った。しかし、実際に一茶の句にあたってみると、住まいを主題とした句の中には、予想した「intimite」は、パシュールが言うような「intimite」や「孤独の空間」というような形では感じられなかった。そのため私の選択が適切ではなかったのかと心配したが、そのうちに一茶の句には直接にそうした特色が見られなくても、何らかの形でそうしたものが潜んでいるのではないかと思うようになった。

では一茶の夏の句での住まいと「intimite」とについて考えよう。

— 共有された住まいの感覚

— 季節によって作られた共同の「intimite」

あら涼しく〜といふもひとり哉（七番日記）

梅雨晴や二軒並んで煤はらい（七番日記）

五月雨や二階住居の草の花（享和句帖）

日本では人間の暮らしが季節と密接な関係を持っている。もちろん日本だけでなく世界中どこでも季節は我々人間の生活に大きな影響を与えている。しかし日本の場合に特殊なのは、俳句に見られるように「人事」（生活習慣とか習俗とか人間社会のことから）が季節と密接な関係を持っていることだ。個人の行為が季節と関連づけられているのは当然のことである。たとえばどんな国でも、暖かくなると薄着に着がえよう。しかし日本では、暦のうえで春がやって来ると、まだ多少寒くても薄着をしてしまうことがある。私の母国、メキシコのように、はっきりした季節の変化がなく、ほとんどいつも暖かくて、寒くなった場合、セーター一枚着るだけで済ませる所では、日本のような暦に合わせた行動は見られない。日本では、メキシコのような気候の国と違って、人間の行動は「物理的な」季節だけでなく、「概念的な」季節に支配されているから、個人個人が、皆同じ時に同じ行為をすることがある。そして個人史のふし目ふし目の思い出を共通項——梅雨とか入学式とか落花などの季語——でくくることができるという現象が見られる。それは集団的な思い出

——郷愁と言えるかも知れない。

「あら涼しく〜といふもひとり哉」は、人々がその共同の「*Zeit*」を必要としていることの象徴であると思う。パシュテールは『空間の詩学』の中で、「片隅にひきこもる」(ひとりになりたいからひとりになる)というフランス語の表現をつかっている。しかしこの句では主体はけっして一人になってよかつたとは思っていない。まわりに誰もいないと気が付いた時に、つまりまわりの人との静かなコミュニケーション、静かな「*intimite*」がなりたたないと気付いた時に、軽い失望の気持を覚える。この句では主体が家族の不在を嘆いているのではない。たとえばとなりの家の誰かが、縁側から「やっと涼しくなったわね」と言ってあげれば、ひとりぼっちの感覚は消えるだろう。この句の主体は血縁の結びつきよりも気候の挨拶に潜んでいる共同の「*intimite*」を必要としているのではないだろうか。

「梅雨晴や二軒並んで煤はらい」の句は、ある地域に定住している個人個人の行為の共通性をよく表しているものだと思う。この句からは人々の間に心が通じ合っている雰囲気伝わって来る。人間の行為は同じ原理——季節の原理や共同の生活の原理のうえになりたっている。そのために社会の中で生きていく者同士の間、個人個人の行為に対する理解や安心感がある。そのうえで人々の間に心が通じ、他人の行為が自分の行為であるかのように、時間がたつにつれて懐かしく思えてくる。そこにも共同の「*intimite*」がある。

「五月雨や二階住居の草の花」これは毎年毎年ある季節がやってくるとともに、自然だけでなく人々の家も着物の模様も食べ物も、その季節との調和の中で変わって来ることを示す句であると思う。

毎年、五月雨の同じ時期に二階住居の草の花が咲く。自然は季節と共に変わるが、人の行為も毎年毎年、自然のように復活すれば、人間の心に不安がなくなり、くり返しの中の安心感がなりたってくる。この句にはそうしたものが感じられる。

パシュテールの「想像力はさまざまにことなる安全度をしめす保護をくまなく体験する。」「一七三頁」あるいは「現実にはひとがすんでいる空間にはみな家の概念の本質がある。」「四〇頁」という指摘は、この句がもたらす安心感と関係を持っている。

個人の家だけでなく、広い空間も主体によって「住まわれていく」ならば、そうした空間にも家的なものがあり、想像力に守護された安心感がある。そのように、季節によって規則正しく変わる江戸、武蔵そして徳川日本の風土は、住民に家的な安心感を提供する。また、ある地方で季節の味に親しんだ個人の生活の思い出は、その季節の味と深く関連づけられ、その季節の味を味わうことによって再び呼び起こされる。そしてそれが他人との共有の「*intimite*」を持つようになる。

## 二 夏に涼しさをもたらすものとしての家自体

パシュテールの指摘に次のようなものがある。

「家を慰めと内密の空間とかんがえ、内密を凝縮し防御すべき空間とかんがえれば、たちまち人間的なものへの転換がおこなわれる。すると一切の合理性からはなれたところに、夢幻の領野がひらかれる。」「八四頁」

一茶の句にはそれらの条件を満たしている次の句がある。

我宿といふばかりでも涼しさよ（七番日記）

涼風の浄土則我家哉（八番日記）

涼しさや一疊敷もおれが家（梅塵八番）

火宅でも持てば涼しき寝起哉（文政句帖）

以上の句は同じことを言っている。というのは、暑苦しい夏には涼しさは我々を元気づけるものである。そして我々に涼しさを提供するのは我が家であるということだ。家すなわち「安らぎ」という条件がここにはっきりと現れている。

涼しさや縁の際なる川手水（文政句帳）

涼しさや山から見へる大座敷（七番日記）

これらの句は前の句よりも詳しい要素でその安らぎを語ってくれ  
る。たとえば「涼しさや縁の際なる川手水」では、縁側にある手水  
から家の中に聞こえて来る川のように流れる水の音が、主体に涼し  
さをもたらす。この句には主体の想像力がはたらいっている。音を通  
じて川を連想し、涼しさを感じる。そこには「安らぎ」があるだけ  
でなく、「intimate」が生まれて来る状況もある。それはパシユラー

ルの以下の指摘による。

「新しい家にすんでいるときに、過去の棲家の思い出がうかんでくると、われわれは固着、幸福の固着を体験する。保護された思い出を再体験することによって、われわれは力づけられる（原文では、われわれは安らぎをおぼえる）。」〔四〇頁〕

主体は彼の長い人生の間に、手水からの音を聞いたときに、幼年期の連想をするだろう。どんな新しい家へ移っても、そのイメージは彼の頭を離れないものであろう。

最後の句、「涼しさや山から見える大座敷」における家とか大座敷の安らぎは、炎天下の山野を歩いている人から想像された安らぎのようだ。この大座敷は主体からオアシスのようにみなされる。主体が大座敷を見るだけでやすらぎを感じられるのは、前出の涼しさや縁の際なる川手水と同じ現象である。というのは、主体は以前に大座敷の涼しさというものを味わったことがあるから、大座敷に一步も足を踏み入れなくとも暑さからのやすらぎを感じることが可能なのだ。そしてパシユラーが指摘するように、「保護された思い出を再体験することによって、われわれは安らぎをおぼえる。」のである。

### 三 夏に涼しさをもたらすものとしての家を囲む宇宙

私はここで「居住機能」を意識しながら家と涼しさの問題を考え、「場」と心や身体の安らぎを表す「intimate」の問題を同時に取り

入れる。しかし西洋人が「intimate」という言葉を連想する場合に  
は、主に、いざとなると他人に見られないように隠れることのでき  
る狭い空間を意味する。そうした空間を代表するのは「片隅」であ  
る。パシュテールは「片隅」の章に続く章を「ミニアチュール」の  
章としている。それは明らかに「片隅」の世界と「ミニアチュール」  
の世界の間につながりがあるからだ。

パシュテールはミニアチュールについて次のように言う。

「全世界が一つの核、胚種、力動的な中心に集中する……。そ  
してこの中心は、想像の中心であるから、力強い。……ミニアチ  
ュールが宇宙の次元へ展開する。またも大きなものが小さなもの  
のなかにふくまれている。」(二〇二頁)

李御寧氏の著作、『縮み志向の日本人』に見るように、日本人は  
ミニアチュールの世界を好む民族として有名である。しかし私は一  
茶の夏の住まいの句の中に、「intimate」を作り出す狭い空間、  
「cozy」な空間、あるいはパシュテールが言うようなミニアチュ  
ールの世界を探そうとしたが、そうしたものを見つけることは出来な  
かった。その代わりに「無限性」の中の「intimate」とでもいっ  
きものが私の前に現れた。

涼しさやどこに住でもふじの山(文政句帳)

夏の夜や枕にしたる筑波山(遺稿)

これらの句にはそれがはっきりと出ている。「どこに住んでも」  
と句の中で指摘されているように、ここでは家自体は問題でなくな  
っている。「ふじの山」という大事なものはあらゆる家に揃ってい  
る。「ふじの山」はすでに各家の部分であって、住民に涼しさとい  
うやすらぎをもたらしているのである。ここで面白いのは、家とふ  
じの山の間距離は完全に無視されていて、「無限性」はいつの間  
にか意識のうえで日常化され、ふじの山と人々の間に「intimate」  
の気持が成り立つことである。

「枕にしたる筑波山」の表現はなおさら印象的である。寝ている  
時間には目にさえ入らない筑波山のイメージは、主体の記憶や心  
印象されて、涼しさや、やすらぎや、守護を与えるものとして認識  
されている。この句では、いかに「無限性」が人間にとってみじか  
なものになれるかが最もよく表われていると思う。

ではパシュテールは「無限性」についてどのように言っているの  
だろう。

「われわれは静止するとたちまち別の場所にいる。すなわちわ  
れわれは無限の世界で夢をみているのだ。無限性は静止した人間  
の運動である。無限性は静かな夢想の力動的な性格の一つなので  
ある。」(二三二頁)

「無限性」についてのこの説明は、一茶の「夏の夜や枕にしたる  
筑波山」の句に潜んでいる「静止した人間」、すなわちこの句の主  
体の「静かな夢想」とびったり符合する。しかもミニアチュールの  
空間だけでなく、無限性の空間にも「intimate」が生きていること

を一茶の句は教えてくれる。

夏に涼しさをもたらすものとしての家を囲む宇宙という点について、次のこの三つの句について考えて見たい。涼しさには色々なベルがある。

涼風や鼠のしらぬ小隅迄 (七番日記)

この句では、涼しさは風という物理的なものによって外から家中に広がって、「鼠のしらぬ小隅」の所まで届く。

白峰の雪の目につく暑さ哉 (希杖本)

この句では暑いが故に白峰の雪が目につき、しばしの涼しさを感じる。この場合、主体に涼しさのやすらぎをもたらしたのは風のような物理的なものではなく、視覚的なものである。一見この句は家と関係がなさそうだが、前出の「涼しさやどこに住んでもふじの山」の句と一脈通じるものがありそうだ。

萱庇やはり涼しき鳥の声 (西紀書込)

この句では家を囲む宇宙と言っても、家から一番近い外の宇宙、すなわち庇から来た鳥の声によって、主体が耳を通じて涼しさのやすらぎを味わうことが出来る。

こうして見ると夏に人間へ涼しさをもたらす一茶の住まいは、広い意味での宇宙との調和によって出来た住まいである。家から遠く

に見える山の白い峰、家の縁に当たる庇という近いところから聞こえて来る鳥の声、家の中心まで流れて来る涼しい風などによって、人間は住まいの安らぎを感じることが出来る。それが一茶の家である。

四 夏の暑さに苦しむ家自体

大家の大雨だれの暑哉 (七番日記)

暑き日やにらみくらする鬼瓦 (文政句帖)

満月に暑さのさめぬ畳哉 (文政句帖)

草葉より暑い風吹く座敷哉 (文政句帖)

我々が一茶のこの句を読むと、家自体は生き物であって、人間と共に夏の暑苦しさを忍ばなければいけないものであることがわかる。一茶はパシユラールがよく使う「生きられた空間」(l'espace vécu)をのりこえる。一茶の句によれば空間は生きられているだけでなく、人間と共に息をしているといえる。しかし家に関する一茶の意識はそこだけにとどまらない。空間は人間に守護を与えると同時に、人間も家を生き物として認識することによって、家に守護を与えるところまでいたっている。「子供に小さい筈、大人に大きな筈」と同じような感覚で、「大家の大雨だれ」の句の中では大家に大雨だれがあることを示唆する。そこには家に対する人間化が見られる。

「にらみくらする鬼瓦」でも言うまでもなく家が人間化されているし、「暑さのさめぬ畳」にも「暑さを逃がさない」畳の人的な行動が感じられる。「草葉より暑い風吹く座敷」でも、窒息するような暑さの中で、暑い風とはいえ、風が届いて来る座敷の安楽な気持ちに、座敷に対する人間扱いがある。その人間化は前出の句ほど明らかではないが、この二つの句での畳と座敷の言葉が句の一番最後のところに来ていて、特別な重みを持っている。その重みには座敷を物として扱うよりも、人的なものとして扱う態度が感じられる。

##### 五 「ごろごろ寝」を中心にした夏の間の人々の生活

私は前に述べたように、昼寝の時間を暑さの中で最も多くの「夢想」をもたらす時間として考え、一茶の昼寝の句を見ようとしたが、そうした句には最初私が予想したような室内での夢想が見えなかったため、もっと広い意味での夢想や「fantasy」を探すことにした。しかし私はここで最初の段階で興味を持った昼寝をテーマにした句を見て行きたい。

昼寝と言っても日本では、「ごろごろ寝」と「昼寝」の二つの種類があるらしい。「ごろごろ寝」と私が名づけたものは一日のスケジュールの中に入る「計画的な」昼寝ではなく、暑さの疲れによる「非計画的な」昼寝のことをいう。それに対して「昼寝」と呼んでいるものは、共同社会が活動のスケジュールの中に入れた「計画的な」昼寝のことをいう。

南米でもスペインでも、暑い地方で「昼」と呼ばれている時間は、正午十二時ではなくて「太陽の時間」と言って、午後二時から四時

までに相当する時間である。日本の夏は一日の一定の時間帯に極端に暑くなるというよりも、一日中何となく暑苦しさが続く。こうした気候の相違から、日本では「昼寝」の感覚の他に「ごろごろ寝」の感覚が生まれてくるのだろう。

日本では習慣としての「昼寝」があつて、それについては一茶の次の句がある。

大の字にふんばたがつて昼寝哉（七番日記）

この句には昼寝が許されているという安心感が感じられることから、私はこの句を「昼寝」の句と見なした。しかし「昼寝」を扱う一茶の句の中では、そうした「計画的な昼寝」よりも「暑さに負けて寝てしまう」いわゆる、私が呼ぶ所の「ごろごろ寝」の句のほうが多い。たとえば仕事をしているうちに寝てしまう句がある。

大帳を枕にしたる暑さかな（八番日記）

十ろばんに脇をもたせて昼寝かな（八番日記）

あらあつし〜と寝るを仕事哉（七番日記）

暑き日や爰にもごろりごろ〜寝（だん袋）

こうした計画的でない「昼寝」の中には、どこかに寝てはいけな



な”気持があるためか、一茶の昼寝の句の中には西洋の室内での「Intime」な昼寝の雰囲気が見られない。

そうした「罪的な」気持を持った句として以下のものがある。

今迄は罪もあたらぬ昼寝哉（八番日記）

親方おやかたの見ぬふりされし昼寝哉（享和句帖）

田の人を心でおがむ昼寝哉（八番日記）

バシュユールの『空間の詩学』にあるように「Intimite」が存在するためには家のもつ安心感や守護の感覚が必要である。たとえば南米の計画的な太陽の時間での昼寝にはそうした要素があるので「Intimite」もなりたつ。私はそのつもりで、日本の昼寝に同じような要素（室内での「Intimite」）を探したが、前述したように、日本の昼寝というか日本のごろごろ寝には「罪的な」要素があるためにそうしたものを見付けることができなかった。

その代わりに一茶の句の中に思いもよらなかった広い空間での「Intimite」を見付けることができた。西洋人が「Intimite」と室内での孤独な時間に出会う代わりに、日本人は一茶の句に見られるように広い自然の孤独の中で「Intimite」に出会うのだと言えるのかも知れない。

[注]

(1) 一茶の句の引用は、『一茶全集』第一巻「発句」夏の部（信濃教育会編、信濃毎日新聞社発行、昭和五十四年八月刊）によった。

(2) Gaston Bachelard, *La Poétique de l'espace* (Presses Universitaires de France, 1964)。

なお、本論中のバシュユールからの引用は、岩村行雄訳『空間の詩学』（思潮社、一九六九年）による。